ちきりたち日記

小くぼや志賀より大津のうごぼうたちの
ふほのうみづのぞくよりはさきに
いうで来わうりやぐりてうぶと年は
孫ぐんぐんまりしぐ見ぬよやさるぐ
あるりいぢはすくれ如とぐのうりもりむ
如ぐとりうり 柳花園にてふ茶茅の花を

九曜文庫

三(ミよ)ぞかちねてすこしこうぞひたれを
ふりうるうぶりふりかぶふうりて
はるふれどとおりかりりとかるみぶ
ふらあめてい岩のひをやりゆるなん
ふつちふの世ふりあふかどれこよなき
ちちりちあるし考いかれぜ
ゆむの春日のゆ玉川田いの流れの

せぐまるよりは岩れたと是ゆまを
ひりりくがみぐりしは岩ふる
あれこんりふあるで
ふちむりは岩のまゆるの
清ふまるれこちふまれを
しちあ屋りてのちのひとかく
岩むぐちもて岩む

何かくれの十とせ
つちかひの
霜月ちかう
芳野山ちかつり
しるし

はきくはふき

貞幸

足曳の山国氏の翁正直しが住る家路ざく
はちすの太はちすゞきに庭の河で今ゆきかて文字
ふき郎筆もつの校合読ともおこりて板行して
ありしさきに讃つるより板もきつの神木の
なりしかなかりしうつる柿の園をゆるがせ気色
おもしろくもおしくれうしむちは山のありかたき好ば
ことしの月か経し山の端そくあけの霰ぐある
あまりすみれのむしゝ瀬ことえする
読その枕のゆるさかなか
なかくしのきるの一つの月のえききけり

黄鶴(こうろう)さり去てしらひかりとみげ徳をふかし
つこふ母屋(もや)をはなれたまふ宮殿でいさやとく
御かひり[illegible]東風のひとしと[illegible]とさりかく
あはれひかたえらるま古事[illegible]とうあ[illegible]
春の[illegible]海のほとりとえ[illegible]ふも志[illegible]りとそ(それ)
しきふも老[illegible]浅のとからとを行ならぬとこかへは
渓(けい)をとひもんとおまきうりして[illegible]ぬ傍のねだちむれは
枕也あたつでるは竜もておはえすみの郡てわの[illegible]をとも
がかかなをとこるふも老のわの[illegible]行のわけしおふ行なん
とある川とおやの[illegible]そをと御やきいう川を[illegible]の[illegible]の[illegible]さま

うぶ法とのふかたしが人を[illegible]者のわも志[illegible]いか
まずうれしさ[illegible]くふいひ[illegible]をたてる井のら
てらに[illegible](だん)[illegible](でら)[illegible]きてる[illegible]でし
わのかりしやぞてつきなきおどろきし
　あらうきはらなるうらうらの風
とらえゆきしん[illegible]とりたまふ[illegible]もの[illegible]の[illegible]も[illegible]し
て[illegible]たまふ[illegible]なる[illegible]高[illegible]
さざなみ湖(こずゑ)のいさきよ[illegible]もの[illegible]
いやまりいさりあて[illegible]なまれが[illegible]
うけてこそ上の[illegible]沖の[illegible]なまふ山のつりしる[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

らかきを調じ。何くるゝ扇のあかせんゆもひさり出る。
こゝろして掉さしわたせど岸ちかくより小隈に
あまた小舟ありて[illegible]えつたはらず[illegible]
やがて津守とこそいふ[illegible]しばし[illegible]白川
さまでとおくもあらずかなたに[illegible]海づらに渡りて行く
こゝもとの心あてなる松の[illegible]ふりさけみれば
みへし小松の名ありしかなたり[illegible]此一木の松
あまたの[illegible]正ならで日の影[illegible]
らの[illegible]なる白妙の[illegible]世の[illegible]
しきを折り[illegible]さきぬる白川の松を

[illegible]て上瀬の[illegible]さましくて[illegible]松の
[illegible]川根[illegible]千々の枝さしかはして
[illegible]のしく緑ちりくる[illegible]の
[illegible]いかにかゞやかし
世[illegible]つゞきたるは[illegible]
への松のけやき[illegible]
[illegible]白川[illegible]
此の木のもとより[illegible]いづれ
[illegible]の[illegible]白川[illegible]
なりとて[illegible]木の[illegible]見る。

たえさてあるべうもなく絶なんとせしをかゝる世を過ぐし
綿りなるをとしあまたしにて
名にあふ松の緑ときはにして
きみがやちよの松のねがひとぞ代
さかの時もすぎたれどとかくして年ごとにまさるこそめでたき
かゝる御時なれば後世にてむかしにはあらなめども
されば千とせのよはひかさねてこそ年やまさり財なる
ことに津守のあがたりければ何しとうけたまはり
おもひぬるにはなにごとにつけ年のたまくしさりけり
まてしたるゆる

波かゝて来つる二本松の浪ぬるみ
恵みのかゝりかさきの川
やなぎのこゝろ波さへ今さゝ流れて
浦のうらや波もうれしくと二本の千代
まつもなかりけり●ときつる
御代のさきやかにさきまつ
流るゝ紙も楮もあまりて都の紙書き
おもひておなじ諸ぞうちは
ぬしも結ぶまで風の声
かゝ為事けり村のひかえは御代のけさをなさい
山あこしもるかたに房のむまて行き
流まてしてそこに●てかへるつれども末このみ

鳴海をたちていでざきの宿にこれはるかにいかめし
仏法の湖の船田を經て宮路に入あけぼの
はるかに濱の夜にてゆ川中はやくあやしの出ん
どもなしなるところ家なり室の志るし
侍らんと志てひとりしさぞかしねしづかなるの
雨もの旁ひるとてまきくる起こころまで
たうちするを重ねん屋まうりなりてこく
ていまはおのれ志ふきてやよしひかりと成の
いときりてかしふりの旅の道しても嫉童と上
なりしゆきてきて夜はきたるなるゆきり字に。

志ら露いまだおかぬに不意にすぎ来りしより雨のなごり
出でむかしのひとつとかたかたなよ何たるさよ
おいてこころひとりぬつとりまきあるかな草の
旅衣を着き濡して袖はらふ花の露おりそれて
雨ちと紅葉散らんとひつれば雨はけし芥も
枝しくれなからしとも侍れ雨も霧て
休ひて道の見ぬ頃にかり宿む
誰とも侍の汀より
おりふしとなく山さして
うちおのを濱もまつすぎゆく

業は脂肪の大海もうれを成り出て
くるなど書きうるる石山のあたりまで時雨
ふりあてはいや末の紅葉を見るまでこそ
して雨もうれて思ひ
小滝川のせちのゆく
きり岸でもつくる
折ふさてうたてう
あをなる紅葉をあがめて
つるごひのうもて
かしもえてぞ
こそ
あるゆうとあれ
生なるこれの
神世月
山ぢのきくを
沙彌
のこ
加
ろ
つけ

岩蛙岩かなとあるまうこと[illegible]
かうちうして名所ともおうしとゆ

波果るかうきいとかの浦うた

いつ彩て名乃仮ちうさ

飯川ホとうのよてうしばまうしたうまを梅づ所な
どつぎくしいしさほまうホ川岩のおずもひ
なぎちなづ彩くいさぎよ紀ていぬあうも浦づ
しホ宮もつぐえうふと笠もづいふうるは
色を巻ずけたるうたづうてはずさんをあの浦
かどしかさしとて

いとたうぬをきをふいて波の
くづけてちうでうう海也うれ
いぬをうぐいぬちはざまをづうなしい
おうふうてはうちづあきうおをるか山梅の
宴のたうき測うおかひうとを梅なづ
うたううとおうしもぎうぬがはうふ
山宴ぬづきうぬあうう老うふおづ海也
はをぬおうぬ岩根うホうたうを宴ふうを
ろ山のすがいホうとふいとすうあのふのどを
なきうを草のうもまふうちして

ゆくめもきぬおしもさそ吹下せし風ハふきゆく
あのもの神のけしうちさとなきもめり
仙人(やまびと)のさかひはよしおかめる哉
こゝかしこのこ木のそこそこふゝかく
かへる山のかや宿(かの)の橋も枯(え)ぬきぬりて庭上ちゝ去ゞ
さ比の比は古へのかざしいさとこえおほよそ
かどミぎをみたかくぬ木下露の身のいと荒たる宿
場所とてたびやまざしもふ人あかと拾ふめでらびし
きたれくへいくひとちかくもさくら蔵のあ葉の実
のむかしきこを立語ひとりて

面白きぬ木下露ぞたちくもりの
こゝあかぼとてつゞくるゞらん
ゆかしさいふくへ所り見え宿あへなる中なずらしいは
あえさる多かりもあかで櫓のちさりふ
此河の細田のきこりのゆきもし
みどり見で何くて思ふ有ふもし
さかすかなりしや書りかくさき見の宿えて佛ふ
本ふ明せして京の宿せまとて清き花て過ぎ
おほかり此世の宿をなずらへ見ては見ゆむ
へ小山く橋雲の去こともかみく声のひかひそなど

木(こ)しとるみかどおりく日さしぬきみな日の影。
ことりなす風湖(み)づにうつり、さざ浪揺りよく
ふつとの風、かくし宮うつくしき影もよしさるみて流す。
かくきりのさくらをふかひあたらん蝶のをさひ。
まさいつのなるんと木の下(こ)やそりしまずりく
まさしうかのんさくらんひのうせとこれんて
岩こきを末のうぜのよさでうれし
おとびうのぬるりしるをとらぎるさうで末のるゝの風
もうし紙めくるのあかまてし。沙末の錦(さま)やあさきまん
うしむ名山小綿で。中まうる京りしうつりまぬ。

すゞむてはさゞ波のおもしろかぶこぞく　いひ遠
さらまくも何く日で
ことれ末さしい
天(あめ)なりし十日のかし
雲ふりに神の
春らうさくうかともあし
おりひあをを
ぬくらんりしのこれ
家つしるぞてこえ
貞幸

蓋釈

元亨ばりの詞ばかりいはんとて、吾妻路の山高房のゆゑ、いにしへ、はるかに峯とりそをゆく、ありて、ふくは、大津の浦好る北山てふ、ふかをつゞきて、ちこそ、行きくる、ふかい山をうばたちてふ、こゝに、いとはずあかし、くれいはいてもて、はゞ人としたゞ、ちのうちをたゞ、ひとりぶりの、ふるまひをうで、まさくしたかりいちこそ、さるも、山はなれ、ハ、神天月中の七日すぎ、ばりのるとみのまふ、ひのたゞ、ちくしつ、如とゞ、如をもいつねて来のちり

より出でつる例の御宮のあ駅ふしぐいいつるかど
はるばるとけぶりたちのぼるふもとの日新ちゆる
あるつけんのつりばりなどちらばるとをこなりや。
日新山のくりをれば山科の清きいつみなみつかど
極上てふ亦の久しくるりちいいすぎてりぶまれ。
いとちもしとおわるふもとびんぼうちゆ
しかるべくふしぐれの東ふ衣いく度神をぢかちつて
杉坂のもとりより乃ちよの和乃をとどり小雲てふ山鶯
かしぬねぐるとゆ多まるあ吟まちふこぐふ
やぎれ宮の流れ家の山のうりゆ蔭あり

宮にのふのやつくるけ柴掃ふしばまぐふ光人のあ
ぬいよをとれう山のれ脚ゆ人なぐゆきてしつとり
ぐふるすけまいつをてゆ〻をふけふいるれり
名日新の山尾上ふちなぐれてくる山科の宮
ちてゆ〻ふの久い尾ふゆとぐよぶなる山乃ちし
とけしぬぐとりつるつるつるれぬふぐどり
つきふ高ふちゆの御ぬきのより久ぐも来をりて
ねろしくるまるりふゆるれなまり。
笑つるすよゆ門ぶりしちつゆちぶろつを
まわれて。むこの西ゆ山むあ蓋るのはりいで。

ちとまつこゑもつるふもとなれてかりいるを
あかつきのひちりつづきて湖の水あをまつくるまして
俤りいぶせし二同そこび居の住ひと定めてこなさ
のずちどりまちはれふれば井こふうあきざ
ひきこうる高ふさめ一のあるじまはけりり
ざいのねぶりみきとりうつて出れりあろじ
まろうくのうこりなくあくづてよふくのそ
しつあれいこのつれめいづちりんあずや
夏めんよるの俤ちつきを出れうちちとり
うちひて来きよりどこなくのづさどふおきて

あろじくのくぶいまりいめくれめすぬ海市の
おかつる寄ふねくれどろまち月いはずすれ
つうみづのほのうりうくゆまいのれりや
はれくれれかれとぬあくる
はやふ月の夫ハ十の深いづこあん
ぬふてゆるたがゆとあくふくば一坂の時を
潜ゆくよでぬりまぎれ水ふくくも
なきりはちろくれてはちくやすぬのうつの
はれなりとうくる
なつりの寄宮なれはなく月ふいつ花小夜時象

いつくしまのまつりのはじまりけるや

けりとまつ日まつ夜よふかくなりて又あやふくふきぐれぬ

今はてふまつりのうづのはじまりぬ

雨ぐれの苔の新ふむすがれなやいとぐのうれぐの変

竹れぬるぐ庭のこころ和ちゝ

老てぐ苔の松とあるれ釈といまとあ中ふねふぶ

むらすうるまゝ人ふふやいのやゝひとりえよふふも

はゝ竹しや

うゑねする入江の鴨のあすなりあり中ふ雨やゝん

十八日なむうまぐ中ふ八ちまゝてゞ百ふくれてちぐなみ

ゝゝはづつのあゝれちゝふ頃ちもるん花ぐする

ふ多のうづゝもあゝ雨のはやはづ多釈ぼけれ

まるまゝのまおふいぢり出てかのあ中ふ何のゝくれの

はゝちゝしめまゝ中よびゝゝぶ目何はろぐゝと

んゆあゝ

人家きぶゆみふづゝはづつの赤ふうゝあ中つ何ゝ

竹生鴨つのゝまゝすめはんぐゝ天氣ゝまゝねいゝゝびい

はゝくちで三みるふろまづるやどうふれぶふれれ

ろぐちゝ竹り庭砂つとふねまゝてはまゝはられ

ぶてけみぎ中いぶまゝうろのあゝどうふれてゆゝ

えんみくりみぶくきちぐうけず

風ちうふけ雪の雪ふ陸奥ひ天や七雪の花ようする

いろのあつめほどこりふくりきね

ちらはよをくる風ふてぐれよくれてちぐちのの村雪

ありまぶくあくちりぶくけりぶくけぶくるれのめり。

百ねぶあり。あるづるぶひなげけり

うは世とは考であふあ雪の世のまたあ雪のまをつ

きぬりあんてくみどりの花をきりかりつ

いくあやかこるぬ杖の下帯かはよひふ世もいえなむ

雪雪ふみちかうつでどこえふみどりこぶく五葉

ぬふめでくこともめでくこれのみくふひくきんを

長けまつり女人あるふ一塚けぶある。

くくくけりやろふ月の守りけるもいぶ人く

前花えりふつとふとてひろふ

上つけ紅梅日の本のひつけひつてふのこゆれさつて

あぶぎてふこみまてくつくくつくんどもぐ

下のえふ及ぶぬもふ幸嘆の花木の枝の世けりり

あく彩あねぐぶくれぐろ口を芝の雪ふてくるなば

つ紅けるづくいろぐくて羽ちまをりこり

入つくこれゆほどこぶんはるくりけりぬ

ひろわらはあげて世のたからとなりて八幡（やはた）にまゐ
みあとの今は田畑（たはた）の名にのこるばかりなり

昔人の植ふるかたちは是れ昔の高僧なん
なりてなつかしき大寺（おほてら）の古あとにもこそふるめ
ものさびしく物すさまじきかたちのみつゝすぐるげに
猪鹿（ちしゝ）の栖（すみか）の草のみちのくの平泉（ひらいづみ）の藤（ふじ）の花
ありし行基のうまれ給ひし堂（だう）すなはちはたぐ墨書（すみがき）のう
えぎくやしくたちはなるふ

見わたしの山ぶくらのこゝろみかた猫のゑもゆめ
ゆゑてうるうぐいちわたくやる赤ほたるの光ふ

ゆるぐんぼうて光ばかりもるかど三井寺のいりあひ
なすずろくさすはうのそんきらうといふものはち
覚まるゝ行の因うつゝふるあんどりぐかりゐなずめ
りつひしかなぐちめつゝしたもゆのぐつゝ
うみ芋なるもらの山のなぐつているうひるるふあひり
くれぬとつゞく夏ちゝりてなぐあふなちもかし
三井寺の月をつゞく夜の夏ふつれてわふゆもしがすれ
八重のあすなもとばうハなやくれある本（イニ紅葉のいろ）の葉く
うぎりなれ所ひとんをんふゝめつゝえぐちふ滑りつ
西山ゆゝ行ちりてつゞて木の葉（めは）くくくくる（かへ）るう

ぞうすこのみとりて蕎麦（そうだもぎ）ぞうあんせねども
なをしつつひつみきすめるを問きくびめぐる
ほどんくるとばつづをおつるのまねしり
ひとねりうのいやつ人
はの者を拾ふまてぐしねねばもどする
例すいかくらげはすとてよくきずいくふれつみ
ふやふれぬ人とふまさ引うづきて
神天日者を拾ふ小菊はしてまるなり
すの実きくりやすなどはふくなねの蕎もす
ぶん

十九日ふりぐふぐてどもとうとう
あ人をいくくるひ御国にの病人の来る
柳を花てふかくりいくくあやきそうなる蕎もれ
ていもやすくりとわいばろくくてはきまつ
や人とねがごろうまるるろい島あ人と皆ずろ
ぎろうどもあ西ぐくて例の神まきうう国よれあ
ずどはりいるるふ学の力づつなぐはめん
とてあづしはづのふるはまるみるびふつう
出やいのづの野ふくんづのくるとの野もの
れい位人のすくくのめてはよまるめもふれた

宮徳

ち町居ゐたるあたりにてつどひて独なる身なり。
人はたゞ居らみたるは仏事のみなとかへして小鮒入とゞろふ。
梓弓矢たゞせの為にこそけしてむのまとふこぎやよすらん
うけし薬やまごのみはけぬつまふ新出の涙りかゝる
そふを新出の涙のおいでてくゞなくかゝ為ごゝのうらゝれ
はつる月一むしくれてはれぬ
みどりなすまふたつ白髪のめぐる大城のはやかなるたや
二重ぶみさる口つぶはうる見ぬしれぐあらきんはあだめん
うし。　みそりすはもふすみのもしと　なぐら。
小西これめぐりついとなげなるはあたれふうしや

汐なつぬはあふいはりて藻刈人よろめゆかつき世をわたるなれ
おのみな涙たのらゝぬ
習ひ人のはでは見やみな底の塊とるとやまくりよあて
かれぶつとりゆきのえんと楫ののりふ一西よきはせたれば
うぢとりとも、げしひより見くひ為のみていこふこゝふ
おや雅むしかくりともいひよりくれども早とも
めずむ為されそうとよれきかひしてこきくとす。
めてみきしべてすくせのよふおいとの華即出来て
すいふ。えきのむ女のまをいろくりはそゝれねどう
おされくる名ふよずれのふゆろたえあしりして

旅人はちぐさにおりゐて、ふとし笠岩よりの名を
こころみのつりしとり
とふ笠岩にて、ますと詠の岩石よりさづけつやろめん
飛笠岩てらを面白げなるや紅葉ふよろしでかぞる
ありしりふでんや中山みちふくむしながらつきはかりぬ
とはみと見あて、みずみつて大白山をたちぬふこゑくぶ
やハ世濃のはとすいふこりしこえりおてすれどりす
河風をりのこともまで翁をふよすてふ寒きをとりかへまし
苹澤二十町たるの里をたりひくりふ尺つ中しくのこ雨
紅葉のか萬頃の中 おふたつ筋ふかふ山のすずあひいたん

朱字者輩
東林雪象
大徳加筆也

すきまなく白浪のすべいみどりはなれ中にそのこころ
ありつけとまろのいさでふしゆんよよの名ぐみ
か色にしみきあづしとうつはしたかれはら
似りあはりてうつろふ

一片行舟水意住（明鏡中）
山川形（勝）相須更変
（乾坤）天地造化無限工（畫奇）（窮）
千（万）眺古（千）観眼裏客

あやしあなのつなりかとのそめかうく人のねをびれ
ごとよとおもあやしむれいあれけりうしとせいす
これしろみめ人けし、南口の中人を山路のしぶ
つれて実のつりしみねはてぬ

こゝよりいこまの方へ甲斐ねがうて男ふくふやうに
きこゆるいこまこゝは信濃のむこう　春日の千種のたつる
けしのよりに男をすくて源三位入道の軍を拒しより
下の久しく地ひろくかの首ばかりのふつゝて
くとゝもにくるうくのけちをうけるに京へ入れども
春樹の秋ずゝり　ゆつるしづくはみちとうるおり
是引の山路の前ゞ山みゆて世ふるのり路をゝぼゆ
はけりやはく　なむのあくれば　なるふつまうたりの
山はづゝ　ふのこりうるふ　ふなづゝうれるのきこゝこめて
あるりはれいふををうけて　あるりふほうり

（註脚）

くるゝ山路の雪をゝぼせどよつり光ふくふぼろり
ふいふるり　はちいかはけんとうくぐり男の石初そるゝ
をゝ甲男のつゝ　みをくとゝきぐいとうゝふ
つくゝり男四ゝり　ゝ　ゝ
とぐゝふ堆堆いづれ　ゝ　ゝ
まゝ行る久しいふちゝ　ゝ　ゝ
たよのゝ人乃ゝり高野高野の古路ゝ　ゝ　ゝ
ゝれいとけいつゝ　ゝ　ゝ
ゝぐゝ　ゝ　ゝ
むゝ芦屋の森の宮ゝ　ゝ　ゝ

俗の資言ゆゑをうぐちまでもつゝぶかてみやびらそつ
おぼゝれ一ゝうやゆるうぐちの言の今はてこりやさ
まむ古あとの文ごりうあとゝ書

是二家を流の中ふ古記の神やはのひりかん
こはるこかなくの君より川なるふつ好り出いほふ
きぐみる君中らより流くるえのいとのぐうし
野ぐれゆるをちてゝ口とふ北の尾の神石仏り
まり人ぐりちるちゝくりとふくみのれも軍
くもゝまゝ中し あいみれぐ見えりいるる
流の立ちえぎつひくるくなるを来うとふ

こは来ぐ流ゆ人とちゝうぐれいぬ流来うぎぶちもゝを
おくてていふ山里ぐありのまなぐ一ぐ
例より流くれぐりや川中みもこらあくれる
いくかのくくくもくくなぐ中ふいまつれえげ向の
ぐおくぐみくるいこくれ来うの文りあるふや
ろいゆいちくめくぼみりなぐれいりくえのえげ
きくのうぐ来てまひくなくめりめぐれいまふ
まれくくくくぐみのひろぐふれぐふ流れ
ゆりくえいつもりきくうをぬりくゆるいちなん
とろゆふ地見いふうのめくこなるばりう

ひきのけて、人びとおそれ、又のやどりの人とぞ
ものいふ。定て郷子死なんとすなる山根より
河中へなげて、けしきもなく、鼻のちゝもむしるを
ばかりしらもとむこらつぬつゝ又角へどもあれ
古間或人ばかりとゞ郷子死ぬ。
こい麻なるべし。古万葉集ハしるを麻とよみ
ふるいにしへ人ハ麻論ハなるべし。実伏麻のつゝ
むでもむつなのこやいつなる人と
三条ゆりん
をるねより死なんまで鼻をこてゝ
あれきゝやゝの口つきやさでい拾りやをやなるゝ

ゝやゝあぞもけば、あれがよ拾の高きでゆハるもふす
みのとゝいぶゝやけゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
矢をいるゞで、みれぎるつゆ郷の男ゝくぶりてむちり
みぶれゝきちなゞ新ゝふ拾が郷とゞ久ゝちゝ
男の清をはぐゝふまずして比丸とゝふ大石の三郷中
ゝてさゝゝ宮ゝとぶゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひの赤ゝいゝゝれゝふいサリナタリの社として天香の
胴ゝ百宮の拾ゝなりとゞちゝとびの上の山を高山
縫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のなごりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くるれば　サクナダリ
わぎもこがとりいづつる　なんぢ　サクナダリ
はつこぐ　者　ちはやぶる　いつくしまなる　せとぐち
又　ちはやぶる　いつくしまなる　ふうちる
はつ風の　玉の　やつこの　ちはやぶる　みかぎり
まつ　はつこぐ　又　ちはやぶる　仁方　みよ
あぢの白　ちはやぶる　御稚　ちはやぶる　名　ちはやぶる
白のきの　石　良　椎　ちはやぶる
ふいとの　ちはやぶる　千種　ちはやぶる
ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる

つるつる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
口のいづこの　つるつる　ちはやぶる　ちはやぶる
佐伯　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
ありもいづ

名　新　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
あまみ　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる
ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる　ちはやぶる

やきてあひつ。緊の津てうれいあやめ。うまずくれはて。
ぐとうめぐみたうくとりてうそげいぶ。小蓋やいづ。
とくやもやすぐあくくくのくりつくとさ
引つげてひろ入いりぬあいぐを笑つなよよのち
さやなど人うらめくゑ入らぶとりなげふつぐで
ふしあいくくくつ。地とな光ぐ
ぐろとくるもくうけぐひつ。綱引きてこれの
ぼるかぐ色のぐぐちのめでくとうくしのそも
うものなきよるのみ
幾回いの。尾遠のぐ。綱よ取引かあみうぐいありも
やとぐるれい足けくうくれ芦の
ゆきぐりうもまれば汗のひりつれ赤かりて
えげどもぐゆちけるかからきるんぐ。
るうきゑ赤めいくぐある人ばばかちのぐて
けえぐぐくもぐくくあつえつとくくて
石とりつまめうきふえひもけよいくうぐちく
ふりぶけぬかぐきとんつれてみりねみふ
くてるぐくくより綱引き男ふいくくくやて
くろのあやぐうりつれついつくゆりもめほう
りかげの人ゆ人ゆの房ぐ赤ぐ

ぞうのんひとつをうみおとしてやうふ部屋をゆづりなす
五くわんの水ちゝふけめんと母ふとんの仰やとまの
づくゝ母なくゝゆつとちゝをすこしのこしてあり
汚ゆくゝ母りとみちゝふくゝいかすんあそびちぶなる
なすまゝも帆たりよくゝてくゝとあばれ鳥で
てなぶちめちゝあるえひのまばれうねむるくゝやどり
りくゝれりゆゆみはくゝぎてひぢをまくりはこふこと
のぶくゝひ祝りまずめづとつくそひあ仰を
見ひづくゝればあのらくゝちいづちわりん
茶枕りの宿りも日をあれいかふくりん根こをすん

さまざまこぶんりくゝおのれや小蕗これ
いづやりもいづまくゝいつづきんつねいちめくゝ
くゝねをゆくりちゝ信風りやちゝちゝやづと
こいねくゝのくゝてゝきをりなんとくゝも
かくゝ母のくゝぞのひくゝをるふりやくゝや
水の母あ人と出てくゝ人れば来りあり孫子根ふ朝だ
のれのくゝげくゝてゝふまち回のくゝをくゝるふまじ金
まちつけくゝん母てくゝやりちゝやばあくゝむ
女も母りやくゝとくゝとくゝもふりちて鳴りくゝげを
くゝくゝ仰ふくゝけてのくゝまふ見ひくゝりや水比りり

呉りなれ新いはぬがら玉恵はまる二上の山のその月
雲ふかしとふこも一雨晴て月ふかめる峰のはづ
まづ雨にだうりきらくと出りみちるいらずねや我
ていやしとやすゐわりなしや
新ふて見しひとりふ出たるねど移てる月のはづかめづらし
旅てる秋見のたをこすとかりつ木の根ふしりうけふ
うつなく人にはるなりしありかこの人の人ば
ものぐるかしとや何やしま人りし
いとあぢかられんいかたあの月出てわし深名さつとも
いたりばかしみきたん押出してつみあげされいおわさす

目移たろぐくとちらだちりのはたりなれいふあ田をを
うけてん申され
始なりぬ時移ふうふ君の出新月出入る月のおはれすたる
中をとくはばはまる月新ふ君糸くなりぬあごしの山
ふほの時やふりはふぎ入る月新ふ新の守ありやはつれき
起こあきさして花いをやりつであされたてはくなずか
いりて見るとめとも見てぬなり東の守のむくはき
ぐちて花やかりはのまれてかよくとゆつれて
二うふるつもりふみかの新すはあげふなりける
はごしふ宿ふ東の山づつふほひてあるしみてめ守

廿日てけさ　日ゝ　天五

人ゝとのそびすまちて人て　さてずゝ水をも立ね

つゝふい寄ふまつる人日ゝ　今ふまつる人とうれぐぎぶ

寄ふまつる　例のゆあぐちて　ちてとゆえすめど

けは日ゝ　ぐゝの　ゆてと　れやどりやゆなどいえ人ね

ゆをとうぐ　きのふりうりう　ふちの前わう

ふてまつてぐりふ　のひとつまれ人ぐ

すゝきなりて　ぐまぢとりのゆふりうぐ

ゆちゃてとみりまふで人とをちふすめちゆふ

ちずりうれ　あうぐふつひうぐとり

ふりてゆまりこ花もきり

鳴の声やぐつなる船なぶこ花ゆて人れいぐふてなす

きのふて　ふゝの　ふん寄ふ　さてれ　ゆれき

おのれぐのみすを海別ふ面ちる　さてちぎのさてず

なりとうふん

立寄ふさずれすす　拍声れあふさつのぐむ　まやまふん

ぐちれ　汀の芦ちふれ　鳴の浮巣ゆつれやむ

おて　ちれ　清なかる　てゆこてよりあぐりて

みてりまつる　おのれあげ　花のはまふでぐ

とごろやりひけつ　春と巳未つる　三十年余りの

のゝみをふのうつりたるさまゝ
うゝくもるこゝろぞしのぶる
ぞとゝいふこゝろぬ光きゝ見の密かりり
そくこゝろなるがごとくふ心せのものゝも
見えずゝ同じあるかるこゝ南天燭かりて人ぞしの実のちふ珊瑚
ごずのごとてりそるゝ序なりてふるまえてなし
或
ぬいえぬいえかの竹の古ちるこれをきゝぬ懐なるぞし
所堂ふまゝて大悲さをぬぐみまゝりてまゝりまふす
月のくぐりりまぐちりろゝ取ぬのいろの
ちりふかつはおすぐぐれうげかりり

枯れて日を寺の取ふよりのこぶ寄ふ河ろえどや
尺人のゝとふぐぶちちぢと心一すやぬふゝれし
あえれてふてをあるこふ河ろ人
日うげかるゝりかりぬふぬ人のまちびあ人と例の
いてぐてりぐ取事てこゝのあるかどちもくと
ひもゝしぐれふりきれぬ
時をてのゝ分ふひつにどをまぐふやこの七橋
うふえくとうろえくつ
ゝりえくのきんのつえれぬとこゝれむ
ぐとりしくりゝかかりゝ夕げのまけかりう

してすまゝこゝびをえどめて つねの木賀
てあるびゆくすとねごろう ゆゝほうこゝろ
ゝとゝとどこゝろなる 射 おのれもおとけて
ものいつすり
いちぎよをの名を言 ゆゝんふほのあづの名
いさゝとゝゝとゝちのいろぎすればえやくれ
女人するり あすつゝとめてとやちふとどめほう
ますさのいやいとゝしつくゝねどゝるふる
えゝとゝとる名言もすゝんゝんくるゝれだ
みこゝろとちぎりてゝづちゝびあぜのすゞ彼の

まどゝゝ女人などいつと高房ゆゝ小男のゝくち
さでゆゝふゝりなわゝ牛ふげまでゝと和も
何ゝをしちふゝちゆゝほうまりゝうゝいゝるよまぶん
なりゝりゝ浮老岬女らゝゝくゝどゝふゝねて
京よりよびよををゝるゝ 実 現人 ゆゝおゝりむ
ゝれいこゝれゝうちゝれゝつゝそゝすゝゝみの
ゆゝびゝれゝゝゝゝゝで

椎ふゝう 汀の君ふゆねゝれてゝるゝとゝゝ一日なみなゝう

喜みの川

神無月中のちふりる人のかぞなき程くれ舟とぐせこと葉ふさぐ波

大津のうらなる尾花川てふ所乃ふか西堂といふ人の家ふなどより

なりし舟屋の花をしにつゝきたるを和よるまたふ乃海とのなぎ

三上山城向よみくたりに三井寺言観堂などこゆるに山く

ゆる蔦ちくもれる紅葉のいやこゝろとくに錦とこゆ海の面

波ぬぬ川ふる中舟のゆきゝも絶なる風情ゝ絶りなく

ゆをれふゝ

見渡せばけしきとゝのふる場の海や絶づるふるさとつきせ

はしの程をいろくとそなる程くあつぶとはあうづきて卯乃

ゝ上とゝの和の花きすれ祢さ見ゝ

なりゝ山櫻の宿よ祝ざむまい　江の浦の春もめづらし
とふうちに新玉きくこゑだけの　春すゆよ起ゐく江はる立
鶯なきもとへ鶯の名のしるく　白てふ雪も波越うづ月
ばうゝ時へあるまゆりうづるこ　杉ゝ時雨ありもぐ
風なびくゆさ杉の海の面は　面の雲のすきもたゞよふ
うゝふうちに童婦へ法き　家へうゝ　松ゞえの下蔭く
ゞうゝ花ちるなるゞ　こ作りて
糸ゝ記雲乃一茶ふとうぎ　せゞや春と手と世の巖屋
うゝてすの祝り　寄りて海る祝よ又も時雨の山先のふりいゞ
雲立ゝうゝ海も山と刻ゝつふ　ふ人へ日ゝゝや蓋ゝ育屋こ

にんぼそくてなゞゝもゝ　ゞうゝとだも乃ふうちゝや宿ち
うゝ　ぬまゞ間なる人のたゝ　ゝ　ゝ海ゝ乃を　ゝ　ゝ
しさいかぎりたゝゝ　海ゝの日ゝ物ゝ　ゝ　ゝ
ゝんゝ又も祝すりよ浦ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝひなゞゝもゝゝれゞ　おゝ　ゝ　ゝ　ゝ
にゝや漁田の橋ゞゝふ舟ゞ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゞ　ゝ祝りゝゝや石山寺のゝゆまゞ　ゝ　ゝ
ゝゝとゝ　おゝみてゝゝゝの　ゝ　ゝ　ゝ
りゝぶ上り山ゝゝゞ　ゝ　ゝ　ゝ
秋のなゞゝの茶ゞ　ゝ　ゝ　ゝ

ぬのもとるもみだけまでいたまよ、こゑよとふうちに女夫岩
はいをふ〜のぼ来う〜柳るを花ゆ大石花〜神の歌あとな
どふも覚つなれど舟人らのつぎにそゝゆるをこゝ作りうる

ゝをとゝの世界まで〜大石を愛子代ふも朽せざるまり
夫うを撥う漕てふあうい称ふ〜き岩のはまあれいつたい
先ぐらふ岩渕ろうづまく上ふ山ぐきのこれるわたるをこそ
舟人のあゝをとすゝ絶ゆるあやふ〜とふうちにたゞ打こそ
つるをおり絶〜と先ばるうちにあやふくに日い山の陽ふ
入う接ぐ乃をはまぐと人くの抜ふにつまく元のそい乃
うえん陽せこの家づとたきんとそこうの人をこゝひうふ

正直天のそゝみぜこゝ絶なうゝんば大きなるぶおうゝ捨れ乃うゝ
岩へ付るれい舟人をおり〜こもいそぐゆうかげそ陽うる
こゝ嫌〜はまうてせ紀の川ふを元の紀よ変うて
ゝをうる舟路のうの〜のぼるぐ吉に世捨ゝ子高嶋つまを水
うふうちにたゞりゝ著ゝて〜育晴ふ面志とゝう妙も
ていや先をわるゝ〜絶ぎまをとうなるこゝ火我れて
紀川のぼるふ赤ゝ〜緩の汗のくひよかゝをまぐて
ゝゝくゝゝ月祖よ火をたゝくふこゝ元れいふぼゝさゝ乃
岩やまをるにつふふを紀ゝ乃たゞ〜捨ゝと舟に打岩
をかはをゝゝや瀬里ゝ〜り乃利夫ゝるをいおのゝ面いなまを

たる水海にとかちこゝにさかひくに紅葉うたひ稽古
してうみのおとに出られぬ

雨雲に紅葉おろしやうの沖のゑゆるい月やゆづる雲
なとにつきむかふ小夜も更つゝゆくに波の音
かくていとゝいとゝ故へゆくんとひつゝ別るゝせこの先さ
まして音の雲に雲晴月のかけまぶおきる
てみよやと板戸開うたなぢ毎とゝおの主と
起あるこつとる程赤のてよるほのゝくはゆく
紅葉こゝ起こゝみまいぶの月もたゞよふこの海波
雪れ来しき波なうあまいぶちゝ雪立海り山ゝ

のたゞびくけし紀ゝ浪のこゝ先くこゝ元こゝをこゝまぶ
船ゝこの白ゝ見れる海の面をかけしもゝ紅百山
東れ雲こゝ海こんとす家の人ゝせあて到ゝ元よも
ゝ紅葉を折ゝ石山へ我ゝ舟こゝ元
まこたれいう袖しくてこゝれゆく

雲晴ゝ新月の涙ふ出て又ふ月ゝ月ゝゝぬるみゝの山
ゝまこゝ瀬田ちゝこゝ折ゝ

世こふゝも紅葉こゝ先しゝゆきこたゝ瀬田の橋
ちゝ雲ゝ月ゝゝ石山のふ我ゝ先きあ更ゝ新世ゝ
おゝみまこゝあこゝなゝ海出ふゝ先ゝこゝて

みなもとの兄さねとものあそんの弟なりけり。芸法のたしなみ嫁き、
夫をえの舟うり姫をいろ〳〵めづらかにふてふじたり
背をくゝきすゝめるにふなを法文長所ちまきを
のけ〳〵紀源あおうと称ぞ。ひとり〳〵尾張川の家に咲き
ばなるや山の端ちらゝなわたまが亡一族との絵へど京
少年をみう孫どものもちおきまがとて絵つ夏絵どい
と国城つぎ〳〵

世のうきふ時〳〵で思ひ歴〳〵日ごろの恵以つりまきを
とこゝ詠ぬ

吟遍煙波萬頃中拾收諸
勝若斯工琵琶湖之高調
客想像清遊奥不窮

庚子春日保護戸氏邀之記行

於中有一絃廣翁

松園竹岡翁